

シンポジウム／口承文芸研究のこれから

フィイルドの現状から考える

酒井 正子

私は一九八三年より奄美・徳之島のフィイルドワークを開始した。まずはこの二〇年余の回顧から始め、フィイルドの現状に関する二、三の報告と問題提起をしたい。

1、回顧 一九八三年徳之島〜二〇〇〇年与那国島

徳之島では集落内に住み込むインテンシブな調査を心がけた。当初の三年間は研究発表どころではなく、泉のように湧き出る口承の歌謡の実態を把握するので精一杯だった。一九八六年の第一〇回大会のとき、恩師の大林太良先生と、民族音楽学の内田るり子先生の強いすすめで、初めて口承文芸学会で発表させていただくことになった。以来フィイルドは沖縄へと広がったが、一貫して「琉球弧の音楽文化」とくに歌謡の生成と伝承をめぐる」を研究テーマとしている。

徳之島ではまず集団の掛け合い歌に出会った。田植歌、キョーダラ（まんきや）、七月踊り歌、正月歌など、徳之島の最も特徴的なジャンルで、非常に生命力がある。中でも重要な労働歌・

儀礼歌である田植歌をとりあげた。男女の二声が掛け合い、もつれあって「斉唱歌のジャングル」といわれるような混沌が現出する。伝統的なジャンルの中に歌の流行と伝播の波が重層的にみられることを発見。口承の歌謡のダイナミズムに接し、まさに歌の生成の現場をみる思いがした（『口承文芸研究』一〇）。以来「歌掛け」を視座に、集団の歌から個人のうわさ歌、甲いの歌へとテーマが深まっていた（拙著一九九六『奄美歌掛けのディアローグ』第一書房、二〇〇五『哭なきうたの民族誌』小学館）。そのみちのりをAV資料で振り返ってみたい（下久志のキョーダラ、手々のまんきや、母間のウヤムイ、井之川のクヤ、与那国のカダイナテイ）。

以上のように一貫して豊かに満ちあふれる「声」「歌」との出会いに導かれ、対面的な状況での歌の生成と変化に関心を持ってきた。それはこれからも変わらないだろう。何よりも歌の現場に身をおき、声や音に接する中で「うたう」行為を考えてゆきたい。口承文芸学会はそうした「現場主義」を共有し、大林・内田両先生に象徴される文化人類学と音楽学の統合的、学際的なアプローチを可能にする場だと考える。テキスト（音楽・文学）研究とコンテキスト（文化的脈絡）研究が相互浸透しあい、新しい知見や展望をもたらすことを期待したい。

2、二〇〇〇年前後からのボーダーレス化現象

しかし今日、歌をとりまく環境は大きく変化している。とく

に「民謡日本一」（日本民謡大賞）を輩出した奄美大島の島唄（三味線歌）では、八〇年代より歌唱のスタイルが大きく変化した。シマ（集落）内部の歌あそびから、教室、ステージへと歌の場が移り、コンクール入賞を競い大舞台で制限時間内に効果的に聴かせる表現が追求された。九〇年代後半からはジャンルとのコラボレーション、アレンジなどが活発になり、若手がメジャーデビューし、奄美島唄が本土に広く知られるようになる。奄美島唄は独自性が強く、ことばのみならず裏声や三味線の複雑な装飾などが特徴的である。個人や地域による差異が大きく統一的な楽譜もない。そのため島唄は島の人しかうたえないし鑑賞もできない、と考えられてきた。しかし現在では本土出身者がうたい、三味線を弾くのは珍しいことではない。ネット空間での増殖、遠隔地への飛び火、異種混交といったポストモダン共通の文化状況がみられるのである。

末岡三穂子によれば、東京には七つの島唄教室があり約二〇〇名が在籍する。生徒の傾向は、奄美外（≠本土）出身者と奄美出身者では大きな違いがある。習い始めの時期は奄美外の人たちは二〇〇〇年以降、奄美出身ではそれ以前が殆どである。また年齢層は、前者が三〇〜四〇歳代中心で二〇歳代も少なくないのに比べ、後者は五〇〜六〇歳以上が専らである（『口承文芸研究』二八）。要するにこれまで年配の奄美出身者中心であったところに、二〇〇〇年を境に、若い奄美外の人たちが多数参入し新しい層を作り出しているのである。彼・彼女らはネッ

トで情報を公開している教室に多く集まっている。中には三ヶ月くらいも練習すると、奄美出身者の年祝いに呼ばれて演奏を頼まれるような人も出てくる。奄美外の人たちが熱心に奄美文化を志向し実践することは、出身者にも大きなインパクトを与え、自分たちの伝統を見直し再評価するきっかけともなっている。移住先の都会で生まれ育った奄美二世、三世が奄美アイデンティティにめざめ、積極的に島唄を習ったり卒論のテーマにとりあげたりすることも多い。本場奄美の歌あそびでうたつてみたいという本土の人、非奄美出身者に招かれ本土に行く島の歌者。列島を交錯するそんな移動が活発である。島とイジャヤキチャヤ（行ったり来たり）しながら島唄を伝承してゆく、そんな時代になったといえよう。昨年度後半の調査より、いくつかのトピックスを紹介したい。

3、二〇〇五年秋〜二〇〇六年春 徳之島の現状

○十一月十三日 第十五回徳之島民謡大会（文化協会主催・教育委員会後援）

「民謡は島の心、みんなで守り育てよう」という統一テーマのもと、徳之島の歌のみをうたう趣旨で一九九一年以来毎年続けられている。徳之島の人々が奄美大島の歌ばかりうたいたがる傾向があり、大島の歌でないコンクールに入賞できない、ともいわれる。このままでは徳之島の歌はすたれてしまう、との危機感より始められ、私もその立ち上げに加わった一人であ

る。今回私は「徳之島民謡にみる『思い』」と題して講話をした。島口（方言）漫談などを含め十八演目が出されたが、毎年、子供たちや知られざる歌者が登場し、徳之島の懐の深さを感じる。近年では、自分の祖父や父の歌を受け継ぐ若者も育っている。

ところがその日の反省会で気になることを聞いた。最近の若い人たちは「あの人とは流派が違うから合わせられない」と言い、先生が違うとなかなか一緒にうたおうとしない、というのである。まさに「歌あそび」とは対極の姿だ。習い始めの子供達には、先生の歌が「すべて」なのだろうか。以前は家の中やシマの「歌あそび」が島唄に接する機会であった。上手下手を問わず参加でき、多様な歌により相対化され、流派というのは生まれるべくもない。あらためて「歌あそび」という装置の柔軟性、創造性を知らされた思いがする。

○十一月十二〜十三日 ワイド祭 NPO法人ワイド21徳之島主催

徳之島名物の闘牛をうたった「ワイド節」をテーマとした芸能イベント。地元の高校生バンドやエイサー、三味線教室、琉舞教室、黒潮太鼓、闘牛太鼓、ワイド節パフォーマンスコンサートなどに加え、ゲストに著名な大島・本土・沖縄の島唄系の歌い手、それに島出身の在京「路上ミュージシャン」が呼ばれた。彼は「島を離れてから島が好きになり、島の文化や歴史にも興味わいてきた。東京から見た島の良さを歌っていきたい」という。

ワイド祭の翌日に、私は主催団体に呼ばれ話をした。四〇代前後の中堅実業家や役場職員等を中心とした集まりで、この四月からは徳之島文化会館の指定管理者として運営を任されている。彼らの悩みは「伝統文化がよくわからない」こと。外の人にはみえる島の良さが、中で暮らしているとわからない。徳之島固有のシマウタなんてあるのか、みえてこない。結果的に大島、沖縄のメジャーな歌い手に依頼することになる。しかし意気込みは盛んで、ネットを活用した発信に策をこらし、勉強会なども熱心に続けているのである。

○二〇〇六年一月二九日 関西奄美民謡芸能保存会 徳之島公演（文化協会共催）

「ふるさとに感謝をこめて」関西在住の奄美諸島出身者による21教室のメンバーが、大挙して訪れた。地元の芸能も共演し、公演は延々五時間にわたった。このように本土在住者の組織が自力で島を訪れる交流活動は、年々盛んになっている。奄美外出身者もそこに加わっている。あらためて、本土と島の両輪で伝統芸能を継承する時代になっていることを痛感する。

4、同 沖縄島北部地域の状況

○二〇〇六年一月二八日 第四回今帰仁村ミヤークニ大会
（今帰仁村歴史文化センター企画）

沖縄島北部地域（国頭・大宜見・東村、名護市、本部半島）は、奄美同様即興的な掛け合いの伝統が色濃い民謡の宝庫であ

る。一九七〇年代の国頭調査では、自作の歌詞を長い巻物に書き、巻物を箱一杯とつてあるような人もいた（小林幸男）という。二〇〇六年一月、私はミヤークニー大会で講演のため久しぶりにこの地を訪れた。すると「この頃めつきりミヤークニーをうたわなくなった」というのである。ミヤークニー（ナークニーの別称）といえば、このあたりが発祥の地ともされる沖繩の代表的な叙情歌で、男女掛け合いのモアシビ歌として知られる。それが「琉舞や古典音楽はやりたがるが、ミヤークニーをやる人が少ない」というのだ。ここでも「見た目」重視のステージ芸能に関心が移っているのだろうか。

そんな中、後継者育成を願って表記の大会はおこなわれた。旧正月前夜で、年の夜の「あしび」の趣があった。出場者十九名のうち七〇歳以上は二人だけで、大半は三〇〜五〇代。一〇代も五人いて世代交代を感じさせる。今帰仁ミヤークニー独特の「中出し」（出だしから高い音程で歌い始める）のスタイルが殆ど聞かれなくなり、かつての多彩さに比べればフシは画一化している。しかしオリジナル歌詞の伝統は脈々と生きており、多くの出演者が自作の歌詞を用意して、自分の境遇や思いをうたいあげる。中には歌物語風に長く男女で掛け合う人もいて、さすが本場だと思った。また「ステージと客席が一体に」というコンセプトどおり、聴衆が実に熱心に聴いていたのが印象的だった。

○名護市宮里の村おどりとエイサー

宮里は、名護市街地の都市的な環境にありながら、伝統的な村おどり（豊年祭の奉納芸能）のシステムを保持している字（集落）の一つである。旧盆明けの旧暦七月十六日から配役等を決め、三週間近い稽古期間を経て旧九月一〇日を中心に前後三日間おこなわれる。毎年二〇もの演目を上演するのは、大変な力量を要する。指導を外部の琉舞研究所等に依頼することはなく、自前の師匠でシマ風を伝える。女踊りもかつては男が演じており、現在も男性の指導者が健在である。子供の演目も用意されており、六、七歳頃からステージに立たせ、素質があると中学生くらいから本格的に琉舞研究所で稽古する。芸能家を育てるコースが、自ずとできあがっているのである。

宮里はまた青年会のエイサーも盛んだ。伝統の手踊りエイサーを保持する一方で、青年達は流行の太鼓エイサーにも憧れる。勇壮な太鼓エイサーは、全国的にも非常な人気がある。一方手踊りエイサーは老若男女が一つの輪になり飛び入りでも踊れる楽しさがあり、地域の伝統行事には欠かせない。長老達は思案の末、手踊りエイサーを続けることを条件に太鼓エイサーも許したという。無論青年たちは手踊りエイサーを嫌がっていない。どちらもやろうという発想、そのエネルギーが素晴らしい。

5、島ことば(方言)とシマウタ

徳之島町では一九八八年以来、毎年成人式の日に新成人を対象としたアンケート調査を実施している(資料)。中に島口(方言)に関する項目がある。当初選択肢は「使える／使えない」の二つだったが、一九九五年より「話せる／少し話せる／解るけど話せない／話せない」の四つに細分化された。おそらく九〇年代に入って「使えない」が増え、その内実をより細かく知りたいということになったのだろう。近年の結果をみると「話せる」人は一〇%程度だが「少し話せる」を合わせれば五〇%近くになる。これはある意味で私の予想を超える高い数字だ。島口文化の健在をものがたっているのではないかと思う。二〇〇六年のデータでは他に、徳之島に生まれたことを誇りに思っている(九七・二%)、郷土芸能(島唄・踊り)を伝承保存した方がよいと思う(八六・二%)など、島への愛着は強い。しかし将来徳之島に住みたい、となると六三%に留まり複雑な心境がある。ともあれ島口が使えないからシマウタをうたわなくなった、というような単純な相関ではなさそうだ。若い人ほど、伝統文化になじみがないという現状がまずあるのだろう。しかし島口で自分たちの境遇にぴったりくるような新シマウタ、ともいうべき歌が生み出される素地はあるのではないか。大島高校では、弁論大会に「普通語」と「英語」の他、「島口弁論」の部がある。沖縄では「宮古口シンガー」と称する下地勇(一九六九年生)が、出身の宮古島の方言で衝撃的な歌を

発信している。彼は「土着に根ざした普遍」をめざしていることだが、琉球語による新しい歌謡表現が、今後も生み出されていくことを期待したい。

6、近代とボーダーレス化のはざままで

以上、奄美では音楽文化の上で近代化現象が顕在化するのは八〇年代からだ。シマ共同体からの離脱と個としての芸術表現の追求、新技術とメディアの介在、ステージ・コンクール・レコーディングの隆盛という形でそれは進行してゆく。さらに九〇年代後半からは、島というボーダーをも越えて島唄が拡張する現代的な状況がある。インターネットの普及が大きな原動力となっている。

一方で島に根ざしたアイデンティティの追求も盛んだ。中若年世代は伝統文化の確たるイメージを模索している。ミヤークニー大会では「身近に聞いて育った世代／生活の中ではさほどうたわれなくなったものの、まだ身体の中かにそのメロディーを携えている方々／歌そのものを知らず、習いに行かなければ分らない世代」(同プログラム)という三世代の区分が示されている。その第二、第三の世代も、伝統文化を決して捨てることなく自らの感性で捉え直し、再表象しながら次の時代を模索していく。奄美でも沖縄でもそうした動きがみられる。近代の淵源とグローバル化、その両方向に引き合うベクトルの中に今後の研究を位置づけていきたい。

伝承者の側では「やる」喜びよりも「みる」みられる「喜び、つまり表象意識の方がまさっているように思われる。全員参加型の歌掛けや八月踊りなどはすたれる（ただし映像記録作成や定期的な練習などをきっかけに盛り返すケースもみられる）一方、舞台等で演ずる芸能は隆盛である。沖縄でいえばミヤークニーや手踊りエイサーよりは村おどりや琉舞、太鼓エイサーへ、という流れである。人にみせる芸、ランキングやコンクールへの熱中は、「視覚優位」やブログの興隆にみるような「総表現社会」といった現代の文化状況と呼応するものがある。その意味で同時代性が強く出ているのである。表象そのものが固有の性質を帯び、現実を逆規定してゆく事態もみられる。しかし奄美島唄の場合、楽譜があっても対面状況で教えてもらわなければ習得は難しい。「歌あそび」の楽しさを再認識する動きもある。奄美の芸能の魅力は、組織化しきれない無意識な部分の瑞々しさにある、と私などは感じているのだが、表象過多の現実にあつて、そうした部分はようになっていくだろうか。イベントやメディア、リーダーや知識人の動向のみに眼を奪われることなく、島に生きる生活者の営みを引き続きみてゆかねばならない。三人称的なまなざしと二人称的な触れあいの両極面のはざまを「生きる」形での、伝承・創作の営みに注目していきたい。

(さかい・まさこ) / 川村学園女子大学

資料 徳之島町 新成人 島口 (方言) アンケート (%は略)

年	回答数 (率)	出席率	使える			使えない
1988	195 (85.2)	80.6	47.2			51.8
1989	187 (90.3)	78.7	43.9			55.6
1990	165 (90.2)	80.6	42.4			57.0
1991	207 (95.0)	81.3	29.2			69.1
1992	188 (96.4)	79.6	28.2			71.3
1993	202 (92.7)	79.0	29.2			70.8
1994	172 (82.3)	74.9	38.9			59.9
			話せる	少し話せる	分かるけど話せない	話せない
1995	193 (88.5)	81.0	12.9	44.0	18.7	24.4
1996	152 (81.7)	83.0	8.5	38.2	30.9	22.4
1997	168 (75.0)	85.5	13.7	39.3	25.0	22.0
1998	177 (81.9)	88.2	13.6	26.5	19.2	40.7
1999	183 (78.5)	88.2	6.6	32.8	26.7	33.9
2000	159 (90.8)	81.4	10.7	43.4	17.0	28.3
2001	171 (90.0)	84.8	5.8	32.7	24.0	37.5
2002	176 (88.9)	88.8	8.5	39.8	23.3	28.4
2003	167 (77.3)	87.1	11.4	40.7	15.6	32.3
2004	108 (55.1)	86.3	6.5	36.1	16.7	40.7
2005	66 (36)	84.0	8.0	33.0	26.0	33.0
2006	109 (62)	85.0	6.4	44.0	23.8	25.7

注) 男は女より「話せる」度合いが高い。

町教委 (生涯教育) 実施
(作成: 酒井正子)